

教育開発・学習支援センター

【2025 年度 大学評価総評】

教員・教員組織では、以下の改善や新たな取り組みが、高く評価できる。「授業リフレクションのための学生による授業参観」では、授業数 20 件（2023 年度 16 件、2022 年度 12 件）、参加登録学生 56 名（2023 年度 45 名）、授業参観参加者のべ 58 名（同 42 名）と、いずれも増加した。また、新たに「学部教授会での FD 研修サポートのためのオンデマンドコンテンツの作成と提供」を行い、13 学部で利用された。さらに、昨今の技術進展が著しく注目されている生成 AI のトピックに対して、「生成 AI ツールに関する教員・学生に対する調査」を新たに実施して報告したことは時宜を得ている。

教育研究等環境では、以下の新たな取り組みが、高く評価できる。「学生 FD スタッフ活用による FD プロジェクト」を発展させ、新たに大学評価室と連携して 3 回開催したこと。ここでの学生の意見を活かして、2025 年度に『学内の学習環境情報の整理』と『学生への案内周知』を実施する方針を決めたこと。「学習支援ハンドブック」では、新たなパートを書き下ろし発刊したこと。さらに、大学院生向け「プレ FD プログラム」では、新たにプレ FD 修了者の登録リスト制度を創設したことが挙げられる。

今年度は、新たな LMS（学習支援システム）の導入に関して、活用促進を図るための教員・学生支援を重点目標と定めており、より効果的な支援に繋がることを期待したい。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

<p><b>【2024 年度大学評価結果総評】（参考）</b></p> <p>教育開発・学習支援センターにおいては、2023 年度新規に取り組んだ「学生 FD スタッフ活用による FD プロジェクト」では、学生目線からみた工夫された授業に関する意見や、学習環境の改善に対する要望を収集し、FD 活動への学生への参画を実現しており評価できる。他の新規取り組み事業についても成果を残しており、特に、昨今生成 AI 技術は飛躍的に進展しその影響は大であり、大学教育における生成 AI 技術に関してリテラシー教育のあり方を含めて検討されることを期待したい。</p>
<p><b>【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】</b></p> <p>「学生スタッフ活用による FD プロジェクト」に関しては、学生の意見を活かしてキャンパス内における自主的な学びを支える学習環境情報を整理して発信する取り組みを進めることとした。生成 AI 技術の教育・学習のあり方を検討するための基礎データとして教員・学生に対する実態調査を実施した。さらに、その結果を活用し教員セミナーで各教員が持つ知識、知恵を共有して教育開発に繋げる取り組みを実施した。生成 AI ツールをテーマとした回は、176 人の参加を記録した。また、2024 年度はプレ FD プログラムをさらに充実させるため、修了者の登録リスト制度を新たに創設した。本制度で各学部の講師確保のニーズに応えることができる。上記、各事業は 2025 年度の年度目標にも盛り込み、継続的に実施することとしている。</p>

(2) 改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

<p>教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげる組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S（さらに改善した又は新たに取り組んだ）</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>＜内容＞</p> <p>教員の資質向上につながる取り組みとして、LF センターでは、教育サポートユニットが教員の FD を担う体制を構築している。教員全体への教育力向上のために「FD 教員セミナー」、個々の教員の授業</p>		

改善のための「授業リフレクションのための学生による授業参観」を展開している。教員向けの「FD 教員セミナー」に関しては、オンライン化を進めるとともに教員ニーズに合わせたテーマを設定することによって毎回 150 名を超える申込水準を達成している。2024 年度は 3 回開催で、のべ 385 名の参加者を実現した(2023 年度のべ 254 名)。「授業リフレクションのための学生による授業参観」も告知を積極的におこない活性化をはかっている。学部長会議、新任教員研修会において積極的な参加を促すことに努めた。また参加学生に関しても Web 掲示板を通して積極的な参加を促すことに取り組んだ。2024 年度の実施授業数の実績は 19 教員の利用で 20 件(2023 年度 16 件、2022 年度 12 件)、参加登録学生 56 名(2023 年度 45 名)、授業参観参加者のべ 58 名(同 42 名)を達成している。2024 年度に新たに取り組んだ学部教授会での FD 研修サポートのためのオンデマンドコンテンツの作成と提供は、のべ 13 学部で利用される状況を作ることができた。

データ活用推進ユニットが担うデータ領域の事業に関しては、生成 AI ツールに関する教員・学生に対する調査(サンプル数 教員 347 件、学生 1,382 件)を新たに実施し報告することができた。本学の教員・学生の使用状況をタイムリーに把握し、教員セミナーにおいて教員間で情報共有と今後の対応を議論する機会を設けることができた。

多様な事業タスクを教育支援課の事務局を含め組織として支え展開している。タスクフォースとなる 3 つのユニットを構成して組織的に推進している。

(3) 改善・向上の取り組み(教育研究等環境)

<p>学生の主体的な学習を支援するための組織的な取り組みを行い成果を得ていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究等環境に関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取り組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>＜内容＞</p> <p>学生の主体的な学習を支援するための取り組みは学習サポートユニットが担っている。学部生向け、大学院生向けにそれぞれ新しい取り組みができた。学部生向けには、2023 年度に新規に立ち上げた「学生 FD スタッフ活用による FD プロジェクト」を発展させて、新たに大学評価室と連携して 3 回開催することができた。学生目線からみた工夫された授業に関する意見、学習環境の改善に対する意見を FD に活かして 2025 年度では学内の学習環境情報の整理と学生への案内周知を実施することとなった。学生の意見を単に聴くだけで終わらすことなく、実際の取り組みに活かす仕組みを作ることができた。「学習支援ハンドブック」については、ディプロマポリシーの学生への理解促進が求められたことから、新たなパートを書き下ろし発刊できた。L ステゼミについては、教員への告知方法を工夫することで応募数を伸ばすことに成功した。通年で 21 講座を開講できた(2023 年度 14 講座)。</p> <p>大学院生向けには、「プレ FD プログラム」を展開しているところである。2024 年度には 1 名のプログラム修了者を出した(2023 年度 2 名)。修了者数は減少したが 2024 年度は新たにプレ FD 修了者の登録リスト制度を創設することができた。今後は、プレ FD プログラムへの大学院生の参加インセンティブとなることを期待している。</p> <p>以上、主体的な学習支援については学部生、大学院生とも新たな取り組みを立ち上げることができた。</p>		

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

<p>教育開発・学習支援センターにおける「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。＞</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究等環境に関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取り組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		

《内容》

学生の主体的な学びを支えるための学習環境として「ピア・ラーニング・スペース」を整備して、提供している。2024年度の利用者数は22,549人とこのべ利用者数は2万人を超えている状況である。学習ステーションの学生スタッフは春学期47名、秋学期42名が自主的に新入生のサポートや学生による企画講座を学生が主体となり開催している。学生自らの意識で活動する機会を提供することに努めている。

正課学習を支援する正課外活動として、Lステゼミを展開している。学部を横断して教員と学生を繋ぎ、社会の多様な課題に触れる機会を作り出している。各学部での専門的な学びだけではなく、多様な視点を提供することで「実践知」の獲得に寄与している。2024年度は多様な教員の応募を期待して募集方法を工夫した結果21講座を開催することができた。参加学生はこのべ125人を達成した。

(2) 学生の声を活かした取り組み

<p>学部レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p> <p>「授業改善アンケート」を春学期と秋学期に集計して情報提供している。また、執行部限定で各授業の自由回答を閲覧できるように権限を付与しており、授業の改善、カリキュラムの改善に学生の声を活かしてもらえる仕組みを提供している。</p> <p>学習支援ハンドブックの作成にあたり、ディプロマポリシーをわかりやすく説明する際に学生たちの生の声を集め内容の改訂に繋げた。</p> <p>【再掲】学部生向けには、2023年度に新規に立ち上げた「学生FDスタッフ活用によるFDプロジェクト」を発展させて、新たに大学評価室と連携して3回開催することができた。学生目線からみた工夫された授業に関する意見、学習環境の改善に対する意見をFDに活かして2025年度では学内の学習環境情報の整理と学生への案内周知を実施することとなった。学生の意見を単に聴くだけで終わらすことなく、実際の取り組みに活かす仕組みを作ることができた。</p>		
<p>授業レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S(さらに改善した又は新たに取組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p> <p>「授業改善アンケート」により学生の声を教員に届ける仕組みを提供している。回答率を上げるために他のアンケートと同時期に実施するなどの試みを行っている。各教員には、前年度の授業アンケート結果に対する改善対応について、次年度のシラバスに記述することを指示し、授業への学生意見の反映の仕組みを作っている。</p> <p>【再掲】「授業リフレクションのための学生による授業参観」も告知を積極的におこない活性化をはかっている。学部長会議、新任教員研修会において教員の積極的な参加を促すことに努めた。また参加学生に関してもWeb掲示板を通して積極的な参加を促すことに取り組んだ。2024年度の実施授業数の実績は19教員の利用で20件(2023年度16件、2022年度12件)、参加登録学生56名(2023年度45名)、授業参観参加者のべ58名(同42名)を達成している。</p>		

Ⅲ. 2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書

<p>評価基準</p>	<p>教員・教員組織</p>
<p>中期目標</p>	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p>

	<p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <p>教員支援</p> <p>(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援</p> <p>(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進</p> <p>(3)教員支援のためのデジタルイゼーション促進とDX活用体制の構築</p> <p>組織FD支援</p> <p>(4)学部FD支援体制の構築</p> <p>(5)全学FD支援体制の構築</p>	
年度目標	<p>既存事業に関しては2023年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方で、適宜事業の見直しを図り、効率的な執行に努め、中期目標の達成を目指す。</p> <p>(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業リフレクションのための学生による授業参観の実施</li> <li>・FD教員セミナーの実施</li> <li>・授業改善アンケートの企画・実施と分析</li> </ul> <p>(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部等教授会へのFD研修</li> <li>・FD研修内容の動画化(新規)</li> </ul> <p>(3)教員支援のためのデジタルイゼーション促進とDX活用体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援システム運営委員会の運営</li> <li>・GPAデータ活用の検討</li> </ul> <p>(4)学部FD支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報共有による教員の授業相互参観の促進</li> <li>・学部等教授会へのFD研修【再掲】</li> <li>・GPCAデータの時系列、規模別、学部別集計分析</li> <li>・GPCAデータの提供及び簡素化</li> </ul> <p>(5)全学FD支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センター活動の学内PRと広報効果の測定</li> <li>・教育開発支援機構企画委員会への参加</li> <li>・FD/SDワークショップ(ミーティング)</li> <li>・シラバスの点検と改善</li> <li>・教員(特に兼任講師)ニーズの収集</li> <li>・教員のAIに対する意識データの収集(新規)</li> </ul>	
達成指標	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S: 80%以上</p> <p>A: 70-79%</p> <p>B: 60-69%</p> <p>C: 60%未満</p>	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<p>「既存事業に関しては2023年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方で、適宜事業の見直しを図り、効率的な執行に努め、中期目標の達成を目指す。」とした教員及び教員組織への事業展開にかかる年度目標に関しては全て達成することができた。</p> <p>従来のある事業については、例年の水準を維持することができた。新規の取り組みについても十分な取り組み実績を残すことができた。具体的には「①教員・学生のAI活用実態把握のための調査の実施」「②学部FDのための動画活用により効果的な事業執行」を実現した。授業改善アンケート、GPA集計結果の公表に当たっては、報告書のあり方を見直して、簡潔化を図った。結果、業務負担が軽減され事業の効率的執行が実現</p>

		した。
	改善策	従来の事業を安定的に推進しつつ、新たに取り組んだ事業についても継続的に展開できるように情報ツールや事業執行体制を常に見直すことにつとめる。また、担当者の負荷が重くならないよう、事業スクラップを考慮に入れつつ効果的な事業への資源配分を考える。
	評価基準	教育研究等環境
	中期目標	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <p>(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援  (2) 対面・オンライン学習環境における学生支援  (3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充  (4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討  (5) 全学DX推進計画と連携した学生カルテによる学修支援体制の構築</p>
	年度目標	<p>既存事業に関しては2023年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方で、適宜事業の見直しを図り、効率的な執行に努め、中期目標の達成を目指す。</p> <p>(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援  ・学生FDスタッフ活用によるFDプロジェクト  ・Newsletterの定期発行  (2) 対面・オンライン学習環境における学生支援  ・「学習支援ハンドブック」の内容検討および改訂  ・学習環境改善検討委員会の運営  ・ピアネット運営委員会の運営  (3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充  ・アカデミック・サポート・サービスの維持  ・アクティブ・ラーニングセットの提供  (4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討  ・Lステゼミの実施  ・プレFDプログラムの実施と情報発信  ・プレFDプログラムの活用方法の検討と提案（新規）  (5) 学生カルテによる学修支援体制の構築  ・Haloデータの活用方法の検討（新規）</p>
	達成指標	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S：80%以上  A：70-79%  B：60-69%  C：60%未満</p>
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	<p>「既存事業に関しては2023年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方で、適宜事業の見直しを図り、効率的な執行に努め、中期目標の達成を目指す。」とした教育研究等環境に関わる事業の年度目標に関しては全て例年通り達成することができた。</p> <p>従来の事業については、例年の水準を維持することができた。新たな取り組みとして取り組んだ「プレFDプログラムの活用方法の検討と提案」では、具体的な制度設計が実現して「プレFD修了者リスト」の設置・案内を開始することができた。また「学習</p>

	支援ハンドブック」の内容検討および改訂では、年度初めには予定していなかったDPの学生への周知追加による改訂にも柔軟かつ迅速に対応することができた。これらの実績により従来の事業にさらに上積みができた。Lステゼミに関しては、告知方法をメールで直接教員に届く方法を試行した結果、教員の応募実績を伸ばすことに成功した。
改善策	従来の事業を安定的に推進しつつ、新たに取り組んだ事業に関しても継続的に展開できるように情報ツールや事業執行体制を常に見直すことにつとめる。また、担当者の負荷が重くならないよう、事業スクラップを考慮に入れつつ効果的な事業への資源配分を考える。
<p><b>【重点目標】</b> 2023年度に立ち上げた学生FDスタッフの活用によるFDプロジェクトを充実させLFセンターの事業として定着化をすすめる。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 2023年度は教育サポートユニットのタスクとしていた学生FDプロジェクトを2024年度は学習サポートユニットと教育サポートユニットの共同体制で実施をすることで教員支援、学生支援の両面にフィードバックするしくみづくりをおこないLFセンター事業への還元を図る。</p> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b> 学生FDプロジェクトは、学習サポートユニットと教育サポートユニットの共同体制で実施することができた。さらに大学評価室とも連携して「FDへの学生参画」の取り組みとして大きな取り組みに発展させることができた。教員支援、学生支援の両面にフィードバックするしくみづくりを目指したことから、プロジェクトで把握した学生ニーズについては、報告書として整理をして、ニューズレターとして広く周知をした。LFセンターのリーダー会議で情報を共有し、事業への還元方法を検討することができた。</p>	

#### IV. 2025年度中期目標・年度目標

評価基準	教員・教員組織
中期目標	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <p>教員支援</p> <p>(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援</p> <p>(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進</p> <p>(3)教員支援のためのデジタルイノベーション促進とDX活用体制の構築</p> <p>組織FD支援</p> <p>(4)学部FD支援体制の構築</p> <p>(5)全学FD支援体制の構築</p>
年度目標	<p>既存事業に関しては2024年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行に努めることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲でKPI設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。</p> <p>教員支援</p> <p>(1)新しい対面・オンライン教育の教員支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業リフレクションのための学生による授業参観の実施</li> <li>・FD教員セミナーの実施（生成AI対応含む）</li> <li>・授業改善アンケートの企画・実施と分析</li> </ul> <p>(2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アカデミック・サポートサービスの提供</li> <li>・外部FD動画サービスの導入と運用</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Newsletter の定期的発行</li> <li>(3)教員支援のためのデジタルイゼーション促進と DX 活用体制の構築             <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援システム運営委員会の運営</li> <li>・新たな学習支援システムの活用支援（新規）</li> <li>・Halo、GPA データ活用方法の情報提供</li> </ul> </li> <li>組織 FD 支援</li> <li>(4)学部 FD 支援体制の構築             <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報共有による教員の授業相互参観の促進</li> <li>・学部等教授会への FD 研修（FD 研修内容の動画追加作成）</li> <li>・Halo のデータ活用方法の検討・案内</li> <li>・GPA/GPCA の時系列、規模別、学部別集計分析</li> <li>・GPA/GPCA の妥当性と活用方法の検討と案内（新規）</li> </ul> </li> <li>(5)全学 FD 支援体制の構築             <ul style="list-style-type: none"> <li>・センター活動の学内 PR と広報効果の測定</li> <li>・教育開発支援機構企画委員会への参加</li> <li>・FD/SD ワークショップ（ミーティング）</li> <li>・シラバスの点検と改善</li> <li>・教員（特に兼任講師）の授業支援ニーズの収集</li> <li>・教員に対する生成 AI の利用に関する調査の実施と分析</li> <li>・教員に対する学習支援システム lms2025 の使用に関するデータの収集と分析（新規）</li> </ul> </li> </ul>
<p>達成指標</p>	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S : 80%以上          A : 70-79%          B : 60-69%          C : 60%未満</p>
<p>評価基準</p>	<p>教育研究等環境</p>
<p>中期目標</p>	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第 2 条に定める 4 つの目的「FD 研究と推進」「全学的 FD 支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LF センター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025 年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)対面・オンライン教育学習環境の全学的支援</li> <li>(2)対面・オンライン学習環境における学生支援</li> <li>(3)教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充</li> <li>(4)正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討</li> <li>(5)全学 DX 推進計画と連携した 学生カルテによる学修支援体制の構築</li> </ol>
<p>年度目標</p>	<p>既存事業に関しては 2024 年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行に努めることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲で KPI 設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)対面・オンライン教育学習環境の全学的支援             <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生 FD スタッフ活用による学生 FD プロジェクト</li> <li>・主体的な学びのための学内学習環境情報の整理と発信（新規）</li> </ul> </li> <li>(2)対面・オンライン学習環境における学生支援             <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ステーションの運営と活用促進</li> <li>・ピア・ラーニングスペースの活用促進（新規）</li> <li>・学習環境改善検討委員会の運営</li> <li>・ピアネット運営委員会の運営</li> </ul> </li> <li>(3)教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充             <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学習支援ハンドブック」の内容検討および改訂</li> </ul> </li> </ol>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「T・Aハンドブック」の内容検討と発行</li> <li>・学生に対する生成 AI の利用に関する調査の実施と分析</li> <li>・学生に対する学習支援システム lms2025 の使用に関するデータの収集と分析（新規）</li> </ul> <p>(4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・L ステゼミの実施</li> <li>・プレFDプログラムの実施と充実（事前研修の実施：新規）</li> <li>・プレFD修了者のリスト登録制度の運用（新規）</li> <li>・プレFD修了者の情報交換コミュニティの企画検討（新規）</li> </ul> <p>(5) 学生カルテによる学修支援体制の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Halo、GPA データの活用方法の検討と案内</li> </ul>
<p>達成指標</p>	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S : 80%以上  A : 70-79%  B : 60-69%  C : 60%未満</p>
	<p><b>【重点目標】</b>  新たな LMS の円滑な導入と活用促進を図るための教員・学生支援に重点的に取り組む。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b>  データ活用推進ユニットにおいて、新たな LMS に関する調査（教員・学生）を実施し課題を把握し調査結果を公開する。調査結果を踏まえて教育サポートユニット、データ活用推進ユニットで連携して、活用促進にむけた教員セミナーの実施する。</p>

## IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

## 教育開発・学習支援センター

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告		
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）		
				自己評価	理由	改善策
教員・教員組織	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <p>教員支援            (1) 新しい対面・オンライン教育の教員支援            (2) FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進            (3) 教員支援のためのデジタルイノベーション促進とDX活用体制の構築</p> <p>組織FD支援            (4) 学部FD支援体制の構築            (5) 全学FD支援体制の構築</p>	<p>既存事業に関しては2024年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行につとめることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲でKPI設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。</p> <p>教員支援            (1)新しい対面・オンライン教育の教員支援            ・授業リフレクションのための学生による授業参観の実施            ・FD教員セミナーの実施（生成AI対応含む）            ・授業改善アンケートの企画・実施と分析            (2)FD支援ツールの活用とアクティブラーニングの推進            ・アカデミック・サポートサービスの提供            ・外部FD動画サービスの導入と運用            ・Newsletterの定期的発行            (3) 教員支援のためのデジタルイノベーション促進とDX活用体制の構築            ・学習支援システム運営委員会の運営            ・新たな学習支援システムの活用支援（新規）            ・Halo、GPAデータ活用方法の情報提供</p> <p>組織FD支援            (4) 学部FD支援体制の構築            ・情報共有による教員の授業相互参観の促進            ・学部等教授会へのFD研修（FD研修内容の動画追加作成）            ・Haloのデータ活用方法の検討・案内            ・GPA/GPCAの時系列、規模別、学部別集計分析            ・GPA/GPCAの妥当性と活用方法の検討と案内（新規）            (5) 全学FD支援体制の構築            ・センター活動の学内PRと広報効果の測定            ・教育開発支援機構企画委員会への参加            ・FD/SDワークショップ（ミーティング）            ・シラバスの点検と改善            ・教員（特に兼任講師）の授業支援ニーズの収集            ・教員に対する生成AIの利用に関する調査の実施と分析            ・教員に対する学習支援システムlms2025の使用に関するデータの収集と分析（新規）</p>	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S：80%以上            A：70-79%            B：60-69%            C：60%未満</p>	S	<p>「既存事業に関しては2024年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行につとめることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲でKPI設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。」とした年度目標に関しては、全て達成することができた。</p> <p>従来事業については、例年の水準を維持することができた。新規の取り組みについても十分な取り組み実績を残すことができた。具体的には重点課題として挙げた①学習支援システムlms2025の使用に関する調査を実施し、FD教員セミナーにつなげて教員支援を充実することができた。また、②学部FDのための動画をさらに追加して13学部で18回の視聴を実現した。これらの実績により従来事業にさらに上積みがあった。</p>	<p>従来事業を安定的に推進しつつ、新たに取り組んだ事業に関しても継続的に展開できるように情報ツールや事業執行体制を常に見直すことにつとめる。2025年度からの事務局の大幅な改組にもなって情報共有やユニット内での事業実施の円滑化が課題である。ユニットメンバー、事務局の負荷が過度に重くならないよう、事業スクラップを考慮に入れつつ、効果的な事業への資源配分を考える。</p> <p>学習支援システムの担当部局（教育システム課）が事務局を担う学務課教育支援担当と分離されたことによる情報共有の希薄化の解消が課題と認識している。改善策として、リーダー会議での状況報告参加など円滑化に向けた取り組みを行う。</p>
教育研究等環境	<p>教育開発・学習支援センターは、その規程第2条に定める4つの目的「FD研究と推進」「全学的FD支援」「学生の主体的学習に資する整備」「LFセンター活動の全学的な調整」の達成を目指している。</p> <p>コロナ禍で激変した教育研究等環境を鑑みつつ、2025年度までの中期目標として以下を設定している。</p> <p>(1) 対面・オンライン教育学習環境の全学的支援            (2) 対面・オンライン学習環境における学生支援            (3) 教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充            (4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討            (5)全学DX推進計画と連携した 学生カルテによる学修支援体制の構築</p>	<p>既存事業に関しては2024年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行につとめることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲でKPI設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。</p> <p>(1)対面・オンライン教育学習環境の全学的支援            ・学生FDスタッフ活用による学生FDプロジェクト            ・主体的な学びのための学内学習環境情報の整理と発信（新規）            (2)対面・オンライン学習環境における学生支援            ・学習ステーションの運営と活用促進            ・ピア・ラーニングスペースの活用促進（新規）            ・学習環境改善検討委員会の運営            ・ピアネット運営委員会の運営            (3)教育学習支援ツールの活用とアクティブラーニングの拡充            ・「学習支援ハンドブック」の内容検討および改訂            ・「T・Aハンドブック」の内容検討と発行            ・学生に対する生成AIの利用に関する調査の実施と分析            ・学生に対する学習支援システムlms2025の使用に関するデータの収集と分析（新規）            (4) 正課外学習と正課学習・アクティブラーニングの連携検討            ・Lステゼミの実施            ・ブレFDプログラムの実施と充実（事前研修の実施：新規）            ・ブレFD修了者のリスト登録制度の運用（新規）            ・ブレFD修了者の情報交換コミュニティの企画検討（新規）            (5) 学生カルテによる学修支援体制の構築            ・Halo、GPAデータの活用方法の検討と案内</p>	<p>事業項目の実施率で評価する。実施水準の高度化、および新しい取り組みの実施については加点評価する。実施率と評価の対応は以下の通り。</p> <p>S：80%以上            A：70-79%            B：60-69%            C：60%未満</p>	S	<p>「既存事業に関しては2024年度の実施水準を維持する。また、新しい取り組みを始めることにより事業内容の充実を実現する一方、適宜事業の見直しを図り効率的な執行につとめることで、センター業務の過負担を避けつつ、中期目標の達成を目指す。可能な範囲でKPI設定による事業成果の数値化に取り組み、客観的な評価につなげる。」とした教育研究等環境に関わる事業の年度目標に対して達成することができた。</p> <p>従来事業については、例年の水準を維持することができた。新たな取り組みとして取り組んだ事業も滞りなく実施できた。具体的には、2024年度の学生FDプロジェクトで要望された学内学習環境情報の整理・発信と対応課題と認識したHaloの活用方法については、学習支援ハンドブックへの情報掲載で対応した。またピア・ラーニング・スペースの活用促進については、学習ステーションスタッフ企画だけでなく、他団体の企画を実施することで利用拡大を図ることができた。ブレFDプログラムに関しては2024年度の修了者インタビューで要望された事前研修に関して実現することができた。修了者リスト登録制度の運用も開始した。これらの実績により従来事業にさらに上積みがあった。</p>	<p>従来事業を安定的に推進しつつ、新たに取り組んだ事業に関しても継続的に展開できるように情報ツールや事業執行体制を常に見直すことにつとめる。事務局の大幅な改組にもなって情報共有やユニット内での事業実施の課題に対応していく。ユニット担当者、事務局の負荷が過度に重くならないよう、事業スクラップを考慮に入れつつ効果的な事業への資源配分を考える。</p> <p>学習サポートユニットメンバーが大幅に刷新している一方で、ユニットを支える事務局が学務課教育支援担当ではないことで情報共有、事業執行が停滞することが懸念される。センター長と学務課教育支援担当によるサポートを含め情報共有の仕組みを作り、情報共有と事業執行の円滑化につとめる。</p>

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。  
 A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。  
 B 目標の達成が不十分である。  
 C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
新たなLMSの円滑な導入と活用促進を図るための教員・学生支援に重点的に取り組む。	データ活用推進ユニットにおいて、新たなLMSに関する調査（教員・学生）を実施し課題を把握し調査結果を公開する。調査結果を踏まえて教育サポートユニット、データ活用推進ユニットで連携して、活用促進にむけた教員セミナーを実施する。
【年度目標達成状況総括】	
2025年度はじめに掲げた目標は全て達成することができた。従来のある事業については例年の水準を維持することができた。新規事業を立ち上げる一方で、既存事業はユニットの努力により冗長な作業を省くなどで効率的な執行ができた。特に、重点目標として掲げた「新たなLMSの円滑な導入と活用促進を図るための教員・学生支援」に関しては、教員への調査実施、学習支援システムの利用状況の把握を通して、当該システムの運用課題を明確にすることができた。教員ニーズの把握をFD教員セミナーの実施につなげた。内部的には教育サポートユニットとデータ活用推進ユニット間の連携がとれた事業執行ができた。また、学生FDプロジェクトで把握した学生のニーズへの対応は学習支援システム運用会議で担当部局と共有しつつ、今後の改善課題への取り組みの道筋をつけることができた。既存事業の執行状況は例年と同水準で執行を完了し、新たな取り組みによる更なる上積みもできた。既存事業の効率化により業務負担の増大も抑えることができています。2025年度の目標のは高水準で達成と総括する。	